Osaka University Knowledge Archive

Title	Sleep disturbances are key symptoms of very early stage Alzheimer disease with behavioral and psychological symptoms : a Japan multi-center cross-sectional study (J-BIRD)
Author(s)	壁下, 康信
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61563
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　名 Name	壁下　康信
論文題名 Title	Sleep disturbances are key symptoms of very early stage Alzheimer disease with behavioral and psychological symptoms: a Japan multi-center cross-sectional study (J-BIRD) （睡眠障害は初期アルツハイマー病の行動心理症状に影響を与える重要な症状である：国内多施設共同研究(J-BIRD)）

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

先行研究において、睡眠障害は認知症の行動心理症状（behavioral-psychological symptoms of dementia; BPSD）に影響を与えることがこれまで指摘されてきた。しかし、認知症進行度別に、睡眠障害が他のBPSDにどのような影響を与えるかどうかは十分に検討されていないのが現状である。今回、認知症原因疾患として最も有病率の高いアルツハイマー病（Alzheimer Disease; AD）患者を対象に、認知症進行度別に睡眠障害とBPSDの関連を詳細に検討することを目的とした。

〔方法(Methods)〕

今回の研究は、国内7施設が参加した認知症とBPSDに関する多施設共同研究「The Japan multicenter study: Behavioral and psychological symptoms Integrated Research in Dementia（J-BIRD)」の一部として行われた。同共同研究に登録された認知症患者2447名のうち、ADと診断された患者1301名において、1)症候性脳血管障害の合併・既往がある者、2)脳血管障害以外の器質性疾患を有する者、3)AD以外の他の認知症疾患を併存している者、4)他欠損値を有するもの、左記4点を除外基準とし、最終的に解析対象となったAD患者は684名であった。調査時年齢、性別、教育年数などの基礎情報の評価に加え、認知機能は、MMSE（Mini-Mental State Examination）にて評価し、認知症の全般重症度はCDR（Clinical Dementia Rating scale）で評価した。BPSDの評価にはNPI（Neuropsychiatric Inventory）を用いた。睡眠障害についてはNPI睡眠スケール（NPI_{sleep}）の得点により評価し、$NPI_{sleep}>0$ を睡眠障害あり、$NPI_{sleep}=0$を睡眠障害なしと定義した。AD患者における睡眠障害とNPIの関連をCDRステージごとに解析を行い検討した。

〔成績(Results)〕

解析対象のAD患者684名(男性206名、女性478名、平均年齢76.3歳、標準偏差8.70)において、睡眠障害の有症者（有症率）は、146名（21.3%）であった。睡眠障害を有する群と有さない群の2群間をCDRごとにNPI下位項目を比較したところ、CDR0.5(very early stage dementia)において、4項目（不安、多幸、脱抑制、異常行動）が、睡眠障害を有する群において有意に有症率が高かった。CDR2（moderate dementia）においては1項目（易刺激性・不安定性）のみが睡眠障害を有する群で有意に有症率が高く、CDR1（mild dementia）、CDR3(severe dementia)においては両群間のNPI下位項目の有症率に有意な差は認めなかった。

睡眠障害項目（NPI_{sleep}）を含まないNPI 10項目合計得点を目的変数とし、年齢、性別、教育年数、MMSE、および睡眠障害の有無を説明変数とした重回帰分析を各CDR別に行った。CDR0.5においては、NPI合計得点の増加に睡眠障害の存在が有意に関連しているが、他の変数は関連していなかった。また、統計学的に解析可能であったCDR1、およびCDR2においては、睡眠障害の存在を含めた他の因子もNPI 10項目合計得点の増加に関連していないことが確かめられた。

〔総　括(Conclusion)〕

AD患者における睡眠障害は、特に認知症の早期ステージのBPSDと強く関連していることが示された。今回の研究により、BPSDの予防・早期介入の観点から、AD診療における早期・軽症段階からの睡眠障害の評価と介入の必要性、および、ADの早期からの睡眠障害を含めたBPSDへの対応法の確立の重要性が示唆された。

（1614 字）

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）　壁下　康信

論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主　査	大阪大学　教授	工藤 喬
	副　査	大阪大学　教授	桑木共之
	副　査	大阪大学　教授	望月秀樹

論文審査の結果の要旨

睡眠障害は認知症の行動心理症状（behavioral-psychological symptoms of dementia; BPSD）に影響を与えるが、認知症進行度別に、睡眠障害が他のBPSDにどのような影響を与えるかどうかは十分に検討されていなかった。今回、申請者は認知症原因疾患として最も有病率の高いアルツハイマー病（Alzheimer Disease; AD）患者を対象に、認知症進行度別に睡眠障害とBPSDの関連を詳細に検討することを目的とした研究を行った。研究の結果、AD患者における睡眠障害の存在は、特に認知症早期ステージのBPSDと強く関連していることが示された。今回の研究により、BPSDの予防・早期介入の観点から、AD診療における早期・軽症段階からの睡眠障害の評価と介入の必要性、及びADの早期段階からの睡眠障害を含めたBPSDへの対応法確立の重要性の根拠となるエビデンスが示された。上記業績により、申請者の研究は博士（医学）の学位授与に値するものと認められる。